

聖書：士師記 4：1～24

説教題：ひとりの女の手

日時：2014年1月12日

士師記 4 章もお決まりのフレーズで始まります。4 章 1 節：「その後、イスラエル人はまた、主の目の前に悪を行なった。エフデは死んでいた。」 前の章で主はエフデ、シャムガルを遣わし、80 年間平穏な生活が続きましたが、さばきつかさが死ぬと、彼らは再び罪の生活へ逆戻りします。主はこれを良しとされません。今度はカナン王ヤビンの手に彼らを売り渡されます。このヤビンの下には將軍シセラがいて、鉄の戦車 900 両を持っていました。その圧倒的な軍事力によって、イスラエルは 20 年間、ひどい圧迫の下に置かれました。イスラエルはこうして主から離れ、悪を行なうことの報いを身をもって学ばなければなりません。主はその彼らの叫びに聞き、なおも助けの御手を与えてくださいます。

今日の箇所に出てくるのは女預言者デボラです。彼女の姿はかつてのモーセを彷彿とさせます。イスラエル人が様々な問題についてモーセのもとに来て神の御心を伺ったように、この時のイスラエル人もデボラのもとに来てさばきを受けていました。通常、男性がリーダーシップを取っていた社会でデボラがこのような働きをしていたことは、彼女がいかに神からの特別な召しと賜物を受けた存在として人々に認められ、受け入れられていたかを示しています。

そんな彼女にある時下った託宣によって、この章は動き始めます。6 節と 7 節：「あるとき、デボラは使いを送って、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せ、彼に言った。『イスラエルの神、主はこう命じられたではありませんか。「タボル山に進軍せよ。ナフタリ族とゼブルン族のうちから一万人を取れ。わたしはヤビンの將軍シセラとその戦車と大軍とをキション川のあなたのところに引き寄せ、彼をあなたの手に渡す。』」 それに対してバラクはこう答えます。8 節：「もしあなたが私と一緒に行ってくださいなら、行きましょう。しかし、もしあなたが私と一緒に行ってくださいなら、行きません。」 このバラクの言葉を私たちはどう見たら良いのでしょうか。ある人はこれを不信仰の言葉と見ます。神の約束を受けながらぐずぐずして、目に見えるデボラに頼ろうとしている、と。またある人は、これは謙遜と結びついた信仰的な言葉だと見ます。デボラの同伴を求めたのは、彼女を神の特別な使いと見ていたからであり、要は主が共にいて下さるように、との祈りをこの言葉に込めたのである、と。果たしてどっちが本当でしょうか？ 9 節を見ると、デボラはバラクと一緒に行くことを約束しますが、同時に、あなたは行こうとしている道で光栄を得ることができないと語っています。7 節では將軍シセラもあなたの手に渡すと言われていましたが、9 節ではそれが撤回されています。これはやはりバラクのまごまごした態度に対する罰であったと見るのが良いのではないのでしょうか。確かに鉄の戦車 900 両を保有し、20 年間も圧倒的な力を見せ付けているシセラを恐れるのは理解できないことではありません。しかしデボラはバラクに問うているのです。だからと言って、人に頼ろうとするのは正しい態度だろうか。主に全くは信頼せず、保険として人にも頼る態度、あるいは人の陰に隠れて自らの信仰をもって主により頼もうとするのでない姿は、決して主が喜ぶたもうものではない、と。

しかし私たちはバラクをあまり悪く見てはならないでしょう。彼はその後、主の命令に従って戦いの準備をし、タボル山に登ります。そして 14 節の「さあ、やりなさい！」とのデボラ

の合図を受けて、先陣を切って一万人を率いて行きます。相手はハイテクの戦車 900 両も持つ大軍隊であることを考えに入れば、これはまさに信仰による戦い以外のなにものでもありません。そして主はこのようにバラクを助けて下さいました。次回見る 5 章 21 節に、「キシヨン川は彼らを押し流した。」と歌われています。おそらくこの時、天候が激変して、キシヨン川が氾濫し、シセラの軍隊は大きなダメージを受けたのでしょう。高い戦闘能力を持つ鉄の戦車も、泥水とぬかるみに足を取られて使い物にならなかった。主はこのようにバラクを助けて下さったのです。このことのゆえにでしょう。バラクはヘブル書 11 章の信仰の勇者たちのリストにその名が加えられています。ヘブル書 11 章 32 節～34 節：「これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時が足りないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。」

ある人は、バラクの信仰がこのように賞賛されているのだから、先の彼の言葉も、信仰の言葉として読むべきではないかと言います。しかしある箇所である人が賞賛されているからと言って、その人の言動を全部信仰的と見る必要はありません。バラクと一緒に名前が上げられていた人たちは完全無欠の人たちだったのでしょうか。ギデオンやサムソン、後のダビデも、みな失敗をした人たちです。であるなら、このバラクにも何らかの欠けが見出されても問題ありません。むしろ私たちはこのことから大きな励ましを受けます。バラクも一度は不完全な姿、弱い姿をさらけ出しました。しかしそんな彼が、なお主のみことばに従って勇敢に行動した時に、新約聖書でその名が覚えられる人物となった。とするなら、私たちも今だ欠け多き者でも、主の召しに従って歩むなら、バラクのように花開かせられる時が来る。そして主はその信仰を賞賛して下さい。私たちはそのように導いて下さる主を見上げて、今歩くように導かれている道を主に従って一步一步進んで行くことが大切ではないでしょうか。

さて、こうしてシセラの軍隊は壊滅状態となりましたが、将軍シセラは取り逃がしてしまいます。この章の残りの焦点は、そのシセラはどうなるのか、そしてデボラの預言はどのように成就するのかということでしょう。その関心を持って読む私たちの前には、思わぬ展開が記されます。シセラはケ二人ヘベルの家へ逃れて、その妻ヤエルに迎えられます。彼はそこで暖かいもてなしを受けます。毛布をかけて休ませてもらい、乳の皮袋をあけて飲ませてもらいます。これで何とかイスラエルの追っ手から姿をくらまし、生き延びることができるだろうと彼は考えたに違いない。そうして安心して熟睡したところ、何と天幕の鉄のくいで地に刺し通されてしまいます。21 節：「だが、ヘベルの妻ヤエルは天幕の鉄のくいを取ると、手に槌を持ってそっと彼のところへ近づき、彼のこめかみに鉄のくいを打ち込んで地に刺し通した。彼は疲れていたもので、熟睡していた。こうして彼は死んだ。」実に衝撃的な最期です。あのシセラが、何の力もない一人の異邦人の女のもとに倒れています！そこへバラクが駆けつけて、敵将の変わり果てた姿を発見します。主の預言はこのようにして成就します。

しかし、ここを読む私たちは、前の章と同じく戸惑いを覚えるかもしれません。シセラがこのような最期を遂げたことは問題ではありません。問題はヤエルがしたこのやり方は認められるのかということです。彼女は味方だと思って近づいて来たシセラを欺きました。偽りの安心感を抱かせました。20 節の「誰か来たら、いないと言ってくれ。」という彼のお願いにも、そ

うしますと彼女は約束したでしょう。そうしておきながら、彼が眠ったところを暗殺した。このようなヤエルの行動は問題がないのでしょうか。神ご自身はこれを良しとされているのでしょうか。

結論から先に申し上げれば、聖書はヤエルのこれらの行動を良いとは言っていません。神がある人のわざを用いたからと言って、神がその人の行動全部を承認しているということにはなりません。究極的な例はイエス様を裏切ったユダです。ユダは自分の意思でイエス様を裏切りましたが、神はそのユダを用いてご自身の計画を成し遂げてしまわれました。ですから結果的にそれが神にどう用いられたかに関係なく、一つ一つの行動は聖書全体の光の下で吟味されなければなりません。すると、ヤエルの行動はどう評価されるべきでしょうか。当然、正しくない点があったのです。明らかにそこには問題があったと言われなければなりません。

もちろん私たちは反対に、彼女のしたことが全部悪だったように見るべきでもありません。彼女に信仰の種があったのは事実です。彼女は異邦人でしたが、その行動には神の民イスラエル人に組みたいという意志が表れています。ですからそこにはイスラエルの神への信仰、聖なる求道心があったのです。そのような良き衝動に動かされつつも、同時にそこには正しくないものも混じっていた。私たちは全部白か、全部黒でないとスッキリしない気持ちになりますが、たいていの場合、そう事は簡単ではありません。自分の場合を振り返ってみても、みことばから来る励ましを心に頂いて信仰によって歩んでいると思っただけで、神に喜ばれない言動を取ってしまうことはあるのではないのでしょうか。ですから私たちはヤエルの信仰を一方で評価しつつ、もう一方では彼女の正しくない点をその通りに指摘して良いのです。「ここは良いが、ここは良くない」と言って良いのです。

そして他人のことはともかく、私たちは自分自身については、みことばの基準に従って歩むべきでしょう。ヤエルの罪を軽くしようとするのではありませんが、彼女にはまだ情状酌量の余地があります。彼女はまず異邦人でした。イスラエル人と同じ神知識・倫理観を持っていなくても当然です。さらに彼女は、今日の私たちのように、イエス様が明らかにされたキリスト教倫理も知りません。当時であっては、このような手を使ってでも悪い王や將軍を倒すのは当然という倫理しかなかったかもしれません。つまり私たちと同じ土俵にはないのです。ですからもし私たちがヤエルの行動をおかしいと判断できるなら、そう判断できるほどに聖書の真理を知る恵みにあずかっている自分であることを神に感謝すべきでしょう。そしてこういう箇所を見たからと言って、すでに教えられている基準を引き下げたり、その感覚を鈍くするのではなく、むしろより勝る恵みの時代に生かされていることを感謝して、一層教えられている基準にふさわしく生きるように努めるのは当然のことでしょう。

さて、今日の箇所はどんなメッセージを私たちに語っているのでしょうか。それは主は私たちの目に不思議な方法でイスラエルに救いをもたらしてくださったということでしょう。女預言者デボラが用いられたこと、鉄の戦車 900 両を持つ相手にバラクが勝利したこと、異邦人の一人の女がシセラを討ち取ったこと、…。特に將軍シセラがヤエルのもとに倒れているのを発見したバラクは何を思ったでしょう。主は前もって、一人の女の手でシセラを渡されると予告しておられましたが、その通りのことが起こりました。バラクは主の主権を新しい光のもとに学んだのではなかったのでしょうか。しかも主は力ある男性の兵士にではなく、一人の女にシセラを渡されたことは何を意味するのでしょうか？それは主は、私たちが予想もしない器を用いてみわ

を進めることができるということです。あの百戦錬磨の將軍シセラが、ただの一人の女のもとで変わり果てた姿となっています。主はそのように、私たちが考えてみなかった方法でみわぎをなすことができるし、しばしばそうされる。

このことは私たちにとって慰めや励ましになるのでしょうか？もし私たちが自分の知恵に頼って生活するなら、主がこのような方であることは望ましいことではないでしょう。自分の計画はいつひっくり返されるか分かりません。むしろ物事は自分の予想外の方向に進むことをこれは意味します。しかし主に信頼を置く者にとって、これは大きな希望のメッセージです。今現在、祝福された状態にあっても、苦しい状態にあっても、主権を持ちたもうお方は主です。その主は私たちの思わぬところから、私たちの救いを作り出すことができます。私たちの目の前には色々な壁が立ちはだかってきます。八方ふさがりのような状況に置かれることもあります。しかし今の私に見えていなくても、それゆえ良い将来は思い描けなくても、主は私たちが全く思いもしなかった方法で私たちに勝利の道を切り開いて下さることができる。この主が、今週の私たちの生活も主権を持って導いてくださることを今夕、改めて告白したく思います。それゆえ、目に見える事柄や人間の考えに基盤を置くのではなく、あわれみ深い全能の主こそ信頼を置き、その奇しい御手によって道を開いていただき、祝福へと生かされる信仰者の幸いに歩みたいと思います。